日本言語文化の未来と古代をつなぐ

2008.04.07～2011.04.04更新

はじめに

広く世界の国々を見渡すとき、日本言語文化の深層がどのような特質を有して存在しているのか、自ずと浮かび上がってきます。日本・中国の諺(ことわざ)に「**温故知新**」すなわち、「故きを温ねて新しきを知る」と云います。この文化を見極めていく慥かな眼力を養う時間でありたいと考えています。同じく諺に「**百聞は一見に如かず**」ともいいます。人から聞いただけでは本統に見極めたことになりません。本統の見極めは、ご自身が見聞・体験することで養われ育まれていきます。

私は、日本言語文化を言語学史(日本語史)をもって少しずつ切り出していくことで、あなた方を言語文化の坩堝(るつぼ)にご案内できたらと考えています。よろしく一年間おつきあいをお願い申し上げます。

自己の「**核**(カク・さね)」を知ること→「核心にせまる」

外側の「**圓**＝**円**(エン・まどか)」の距離を確かめる

「まどか」→「つぶ【粒】」→「つぶらな瞳」「つむじ【旋毛】」…「m・b」音相通例：【煙】「けぶり」と「けむり」。

【寒】「さぶい」と「さむい」【被・冠】「かぶる」と「かむる」など。

「〇」…「円」は「**縁**(エン・えにし)」…「円相」「柳の枝」「はなむけ【餞】」のことを意味します。

人として生きる五つの柱

一　「**格内**」と「**格外**」の**精神**ということば。

禅の精神に「格」ということばがあります。仏教語はわたしたちの生活用語のなかに知らず知らずのうちに融け込んでいます。ですが、この「格」についてはそうでもない。きっちりしている感があります。普通一般のわくや型を越えた深遠な趣き。そのすぐれた旨を表現するのに「格外の旨」としてと言われます。宴曲『拾菓集』〔一三〇六年〕巻下・曹源宗に、「向上の一路千聖も伝へず。格外の宗(むね)は又、遙かに文字の外に出づ」とあります。では、「格内」とはなんぞや。ひとのからだの部位でいうところの「へそ【臍】」に相当します。じゃあ、「へそ」とはなんぞや、わが母との絆(きずな)のあかしです。

二　「**風土**」ということば。

「かぜ」は旅人、「つち」は土地の人を意味します。旅人はほんの少数です。これに対し土地の人は大勢居ます。このかぜとつちとが程よく混じり合うことで新たなものが芽生えるのです。自然は悠大かつ嶮岨で厳しい姿を一瞬にして私たちに突きつけてきます。この豊かな自然の営みに感謝し、あらゆる万物が生きてゆく上で、「**風土**」はかけがいのない寶物なのです。

三　「**靈氣**」ということば。

「みたま」のちからは、「け」となってわが身をとりなしてくれます。「け」と「氣配(ケハヒ)」「氣調(いきなし)」と古代から言い伝えられてきたことばです。「天氣」といえば、「万物を生育する、天にみなぎっている精氣」の意を表しています。『拾

玉得花』(一四二八年)に、「勧進、大庭の申楽は、天・地・人の三才の氣に通じ、庭申楽・内能なんどは、人氣の体のみにて、天氣は用なることあるべし」と言うのです。まさに「靈氣」は、神秘的な気配であり、氣調なのでしょう。「みたま」に心身を委ね、すべてをすなおに聞くことからはじまります。

四　「**道人**(ダウジン)」ということば。

「道人」とは、ひとつの道(みち)を極めることができた人への称号でもあります。「藝道」「書道」「華道」「香道」「陶道」「柔道」「剣道」「空手道」などという具合に、その「みち」の上に冠りされた事象を時を費やして身につけていく姿勢でもあります。「藝動」は、ひとの生きる手本でもあります。喜怒哀楽を一瞬にして表現し、具現化して人に見せ、魅了します。「かたち」あるものとはピタッと決まることを意味しています。身も心も内から突き上げるようにして満ちてきます。この「かたち」、体力・精神力を持ってしても永く保持することはなりませんが、多くの失敗(しくじり)を重ねてきたればこそ、気を忽せにすることなく真っ向精進し、つまずいたら初心に帰ることを知っているか否かでしょう。いきなりパッと咲く花なんぞないのでございますよ。

五　「**生命の水**」…　和語「みづ【水】漢語「スイ」。

英語で「ウオーター」。イタリア語で「アクア」。ユダヤ語で「マイム」。韓国語で「ムゥル」といいます。同じ地球の上でくらす人々そして凡ての生き物が必要しているのが「みづ【水】」なのです。この水も地下水脈をぬって滾々と湧き出る泉(いづみ)からの清水が一番でしょう。私は、幼少の頃から静岡県清水町伏見という地にある柿田川湧水の源流で育ちました。清らかな水の源は大きな大きな「湧き場」と呼ばれるところがあちこちにありました。この大量の水が毎秒八万トンの勢いで柿田川を流れていきます。途中には水鏡のように碧碧と研ぎ澄まされた「あをどんぶら」というところを岸辺ちかくに見ることができます。この川伝いに学校に通ったことを忘れません。

こんな私と水との関係(かかわり)は、北の釧路湿原から南の屋久島にまで足を運ぶ機縁ともなりました。

異言語文化と接触

私は、二〇〇四年四月から二〇〇五年春三月まで外国の異なる文化に直接出会ったことで、より日本の言語文化が明瞭に見えてきました。その私なりに見えた世界を、あなた方にこの講義を通じて伝えて行きます。

手始めとして、私のHPに書込みした内容の一部を散策なさってみてくださいませ。

日本人はどうして身近な自国のたかだか数十年前の歴史の記録を記憶していないのでしょうか？記憶の片隅に自身が歩んできた道筋を留めておく術を知らないからでしょうか？それとも、自分の書き綴った内容すら遠い記憶の彼方へ置き去りにしてしまうことが度重なったのでしょうか？

そして、祖先の人々が大切な言語文化を保持し、これを次に継承していくその受け渡しの方法をすべて止めてしまったとき、私たちは日本人である誇りも自負心も根底から失うことにも成りかねないのではないでしょうか……。

人類の言語行動を「好い」とか「悪い」といったことばで判断することは、未来に遺すもの、過去の残骸として捨て置くものと区分けされつつも、人が人として歩み続けた真髄が大きな智恵の遺産としてこれまでに存在しています。この「保存する」「消去する」という二つの選択方法という智恵の遺産を学ぶことで、次なる世代に確実に物事の必要度合いの検証を伝えていくことにもなるのです。

人は伝えるべき根幹ともなる資質をまず養うことから始めることになります。基本となる資質を身につけたとき、人は前を歩む人と肩を並べ、一緒に暫時(しばらく)歩むことができます。やがて、その歩みが自然に加速して、未来に羽ばたく若い学び人が元気に前に突き進むことになりましょう。その極みが山でいう「分水嶺」と見れば、長い長い急な坂を駆け上り、やがて平らなる峠に行き着き、次にゆっくりと下降していくのも人の道であることを

知るのです。

この受け渡しは、必ずしも完璧にいくとは限りません。時には予期せぬ変容を強いられることもあるでしょう。自然に山あり、谷あり、川あり、森あり、海ありと同じように多くの異なる事象文物と触れあうからです。その事象文物をどう見極め、人として使いこなすのかは、当に人があってできることですので、「**千差万別**」と言えるものではないでしょうか。この変容そのものが人が伝達手段として用いる言語行動にもあることは誰もが知ることがらなのでしょう。

現代を生きる人類の智恵は、一〇〇年前に現実に存在した人の姿を写真というものに留め、またその語り聞かせる声も録音という機器道具でそのまま遺してきました。それまでは、人が手で書写した文字や絵画による文献資料が伝えていたことをこれらが直接請け出すことで、万人に伝え見て聞かすことが可能となってきたのです。

ここに到達する以前の日本人の言語行動表現は、伝統芸能という「神楽」・「猿楽」・「平曲」・「能狂言」・「歌舞伎」・「落語」・「講談」といった親から子へ、子々孫々。または、師から弟子へと「**一身直伝**」という形態で保持されてきました。時には伝統の燈が寸前のところで消えかかるという危機に追い詰められることもありました。この危機を乗り切るにあたって、「伝統保存会」が結成され、民衆の力でこれを維持し、今日に継承してきたのです。

あなたは、「**伝統芸術**」という世界に触れる機会をお持ちでしょうか？また、その道を知っていますか？伝統が生み出した意匠には、それ以前に編み出された創意工夫の世界観が美事に広がっています。この意匠をどう受け止め、次にどのように移行していくかが求められて行きます。

イタリアの最古に栄えた文明とは

イタリア国のポンペイには二〇〇〇年前から悠久な人々の豊かな暮らしがありました。競技場、野外音楽堂、大衆浴場、盛り場、パン工房、そして、馬車道、水道設備と近代の文明に等しい生活形態を保持していました。しかし、此の地にベスビオ火山の噴火による火山灰が町をすべて呑み込んでしまうとは誰も予期もしなかったことでしょう。優れた人類が築き挙げた文明であっても人も生き物もすべてこの灰の底に沈みました。

人が人を倒す戦争という行為も同じです。言語活動の中止を余儀なくされるからです。日本の国はユーラシア大陸東アジアの最東端にあり、周囲をぐるりと海に囲まれた海の国であります。これは昔も今も変わりません。人々の多くはこの海を越えやってくる。海を越えて出かけていくしかその交通の手段がなかったのがこの東北の端に位置する日本の国をある意味で他民族との興亡の争いから救ってきもしました。国内での内乱は数多く

続きましたが、ことばの通じない他民族国家との興亡が無かったのが幸いしています。唯一、民族闘争に目を向けて求めてみると、アイヌ民族と和民族とでもいうものでしょう。慥かにアイヌ語と日本語とでは、異なった言語です。どの民族闘争でも勝敗はつきものです。勝った側が覇権を手中にし、負けた側が服従隷属する仕組み構造が人類の歩みのなかに存在します。日本でも大和民族が覇者となり、他の部族は「浮囚人」として、一定の抑留地に留め置かれていきました。といっても、すべてが劣勢のなかにあるとは限りません。その「浮囚」と呼ばれる地域のなかから、あらゆる逆境を乗り越えて際だった人材がこの世に多く輩出ことにもなるのですから……。

日本から西洋イタリアへ渡航した人

やがて、海洋を大勢で航海する高い技術が西洋に生まれ、日本をめざすことも容易になったのです。南蛮船が渡来する時代も訪れます。この日本からも逆に船出することも出来るようになっていきました。伊達正宗が家臣**支倉常長六衛門**に命じて、太平洋を縦断しスペイン経由でイタリア国ローマ法王に謁見し、正宗の親書を手渡して、やがて日本に帰国します。その家臣である支倉常長のことは、日本では江戸幕府による鎖国令の政策が強化されていましたので、その状況が隠蔽されつづけ誰一人、この史実を知るものも無くなっていました。

また、豊後大分の大名家に育成した、**日本人宣教師ペトロ・カスイ・岐部**(ペドロ岐部　松永伍一著　中公新書刊)がいます。ペトロ岐部は、十九歳のとき有馬の神学校に入りラテン語やポルトガル語を学び、卒業後、外人宣教師や修道士の世話をしたり通訳をしたりする仕事をする(同宿という)。二十六歳のとき、家康のきびしい禁令をのがれてマカオに向かいました。さらに、陸路を往きエルサレムを経てローマまで足を延ばしています。ローマのグレゴリオ大学倫理神学科に入学しています。三年の留学を終えて一六二三年(元和九年・徳川秀忠将軍宣下)帰国の途に就きました。薩摩の坊の津に着いたのは、日本を離れて十六年も立っていたのです。日本では切支丹迫害の嵐が吹きすさぶ状況下にあったのです。彼は長崎から東北の伊達領に移動し、その宣教活動中に捕縛されてしまうのです。一六三九年(寛永一六年・一六三七年から一六三八年に島原の乱が起きる)である。幕府の評定所で残酷な拷問を受けるも屈しなかったために殺害されています。

大分の先哲http://www.e-obs.com/rekisi/sentetu/shokai/petoro.htm

ペトロ岐部http://tanizoko2.hp.infoseek.co.jp/petter_kibe.html

ペトロ岐部を知っていますか?http://blogs.dion.ne.jp/mrgoodnews/archives/1822791.html

ペトロ岐部カスイ(宮崎県)http://www.kyushu01.com/01/0704/0704-135.html

近代から現代における人と人の交流

『八〇日間世界一周の旅』、これは人類にとって夢ものがたりのような旅でしたが、そしてとうとう近代において実現されたのです。この壮大なる海洋航路が用いられ、次に空を飛ぶ飛行船や飛行機（大型ジェット旅客飛行機）の発明によって、これもあっという間に世界中を謁見できる多くの人々を今日生み出しています。でも、その言語活動自体は、一足飛びには変容はしませんでした。知らず知らずのうちに、自分たちがふだん話していることばが変わってきていることに気づくに過ぎません。自分の祖父母と話しをした経験のある方であれば、その祖父母の話すことばが自分たちの用いている語彙とは全く異にするものを含んでいることに気づかされた経験を一度二度は必ずやあるということなのです。

たとえば、「乗合自動車」から→「バス」→「ＢＵＳ」へ。「写真機」から→「カメラ」。「葡萄酒」から→「ワイン」。「おてしょ」が「小皿」といったことばの変容は、同じ時代を生きる人であっても年齢による位相語ということばの垣根ができているのです。また、「慣用句表現」になると、「熱に浮かされる」から「熱にうなされる」といった意味合いをも取り違えてしまう言い回しがあったりもしています。このように、本来の意味合いを忘れ、失っていくことで「慣用句表現」ですら、いくつもの言い回しを変容させてきていたことにも氣づかされるでしょう。

こうしたことばの表現がいつ迄用いられていたのか、それを知る手がかりも自分のルーツに一度は触れるきっかけであるからです。

さて、話すことば以上に、書くことばはもっとゆったりと変化していきました。この「話すこと」、そして「書くこと」の言語変化の道筋を私と一緒にこれから辿っていきましょう。とりわけ、歩みの鈍い「書き言葉」、言い換えれば「文字言語で書かれたことば」、学術用語でいうところの「書記言語＝①ある文字で表記し、これを記録し、これが周知の人々が意味判読できることば、②ある一部の人たちだけに意味判読できることば（隠語・暗号ことば）」に重点をおきながら、一年間の講義と相互対話を通じて一緒に学ぶことにします。